

池田勇人追悼演説

JJ1SXA/池

後掲するのが、昭和 35 年 10 月 12 日、日比谷公会堂での演説中、右翼少年の凶刃に倒れた、日本社会党中央執行委員長・浅沼稻次郎氏の死を悼み、国会で追悼演説をした池田勇人総理大臣(当時)の演説草稿全文だ、出展は、昭和 35 年 10 月 18 日第 36 回衆議院会議録第 2 号による。

前稿、「安倍元総理の国葬に関し」の最後の方に、…演説下手だった池田氏だが、その調子は人の心に迫る哀調を帯びていた、だから今でも語り継がれている、与野党の対立を超えた人間的フェアプレーの精神が残っていた時代だったのか、今はそれが無いのが残念だ、武士道精神は何处へ?…と書いたが、今の野党や左翼ジャーナリズムに期待しても無理だろう、二重国籍問題で頬被りしたままの蓮舫氏や、衆院選で落選、参院選で比例代表で復活した辻元清美氏や、安倍総理の間は憲法改正の議論はしないなどとの迷言を宣まっていた岡田克也氏のようなメンバーが、要職を務めるような党が野党第 1 党では、与野党の垣根を越えてなどというのは、所詮無い物ねだりでしか無いようだ。

此の追悼文を良く噛み締めて読めと提言する、政敵であっても、好き嫌いでは無く、人として尊重し、死を悼む心を持って、人の死を政治に利用するなどは以ての外だ。

池田勇人追悼演説草稿

日本社会党中央執行委員長、議員浅沼稻次郎君は、去る十二日、日比谷公会堂での演説のさなか、暴漢の凶刃に倒れられました。

私は、皆様の御賛同を得て、議員一同を代表し、全国民の前に、つつしんで追悼の言葉を申し述べたいと存じます。

ただいま、この壇上に立ちまして、皆様と相対するとき、私は、この議場に一つの空席をはっきりと認めるのであります。私が、心ひそかに、本会議のこの壇上で、その人を相手に政策の論争を行ない、また、来たるべき総選挙には、全国各地の街頭で、その人を相手に政策の論議を行なおうと誓った好敵手の席であります。

かつて、ここから発せられる一つの声を、私は、社会党の党大会に、また、あるときは大衆の先頭に聞いたのであります。今その人はなく、その声もやみました。私は、だれに向かって論争をいどめばよいのでありましょうか。しかし、心を澄まして耳を傾ければ、私には、そこから一つの叫び声があるように思われてなりません。「わが身に起こったことを他の人に起こさせてはならない」、「暴力は民主政治家にとって共通の敵である」と、この声は叫んでいるのであります。

私は、目的のために手段を選ばぬ風潮を今後絶対に許さぬことを、皆さんとともに、はっきり誓いたいと存じます。これこそ、故浅沼稻次郎君のみたまに供うる唯一の玉ぐしであることを信ずるからであります。

浅沼君は、明治三十一年十二月東京都下三宅島に生まれ、東京府立第三中学を経て早稲田大学政経学部に進学されました。早くから早稲田の北沢新次郎教授や高校時代の河合栄治郎氏らの風貌に接し、思想的には社会主義の洗礼を受けられたようであります。

当時、第一次大戦が終わり、ソビエトの「十月の嵐」が吹いたあとだけに、「人民の中に」

の運動が思想界を風靡していました。君は、民人同盟会から建設者同盟と、思想運動の中に身をゆだね、検束と投獄の過程を経て、ごく自然に社会主義運動の戦列に加わったのであります。

大正十二年母校を卒業するや、日本労働総同盟鉦山部、日本農民組合等に関係して、社会運動の実践に情熱を注ぎ、大正十四年の普選を機会に、政治運動に身を挺したのであります。

すなわち、同十四年農民労働党の書記長となり、翌十五年日本労働党[1]の中央執行委員となった後は、日労系主流のおもむくところに従い、戦時中のあの政党解消が行なわれるまで、数々の革新政党を巡礼されたのであります。

君が初めて本院に議席を占められたのは、昭和十一年の第十九回総選挙に東京第四区から立候補してみごと当選されたときであります。以来、昭和十七年のいわゆる翼賛選挙を除いて、今日まで当選すること前後九回、在職二十年九カ月の長きに及んでおります。

戦後、同志とともに、いち早く日本社会党の結成に努力されました。昭和二十二年四月の総選挙において同党が第一党となり、新憲法下の第一回国会が召集されますと、君は衆望をになって初代の本院議運委員長に選ばれました。書記長代理の重責にあって党務に尽瘁するかたわら、君はよく松岡議長を助けて国会の運営に努力されたのであります。幾多の国会関係法規の制定、数々の慣行の確立、あるいは総司令部との交渉等、その活躍ぶりは、与・野党を問わず、ひとしく賛嘆の的となったものであります。

翌二十三年三月、君は、日本社会党の書記長に当選、自来、十一年間にわたってその職にあり、本年三月には選ばれて中央執行委員長となり、野党第一党の党首として、今後の活躍が期待されていたのであります。

かくて、君は、戦前戦後の四十年間を通じ、一貫して社会主義政党の発展のために尽力され、君自身が社会党のシンボルとなるまでに成長されたのであります。浅沼君の名はわが国政治史上永久に特筆さるべきものと信じて疑いません。

君がかかる栄誉をになわれるのも、ひつきょう、その人となりに負うものと考えてるのであります。

浅沼君は、性明朗にして開放的であり、上長に仕えて謙虚、下僚に接して細心でありました。かくてこそ、複雑な社会主義運動の渦中、よく書記長の重職を果たして委員長の地位につかれ得たものと思うのであります。

君は、また、大衆のために奉仕することをその政治的信条としておられました。文字通り東奔西走、比類なき雄弁と情熱をもって直接国民大衆に訴え続けられたのであります。

沼は演説百姓よ
よごれた服にボロカバン
きょうは本所の公会堂
あすは京都の辻の寺

これは、大正末年、日労党結成当時、浅沼君の友人がうたったものであります。委員長と

なっからも、この演説百姓の精神はいささかも衰えを見せませんでした。全国各地で演説を行なう君の姿は、今なお、われわれの眼底に、ほうふつたるものがあります。

「演説こそは大衆運動三十年の私の唯一の武器だ。これが私の党に尽くす道である」と生前君が語られたのを思い、七日前の日比谷のできごとを思うとき、君が素志のなみなみならぬを覚えて暗たんたる気持にならざるを得ません。

君は、日ごろ清貧に甘んじ、三十年来、東京下町のアパートに質素な生活を続けられました。愛犬を連れて近所を散歩され、これを日常の楽しみとされたのであります。国民は、君が雄弁に耳を傾けると同時に、かかる君の庶民的な姿に限りない親しみを感じたのであります。君が凶手に倒れたとの報が伝わるや、全国の人々がひとしく驚きと悲しみの声を上げたのは、君に対する国民の信頼と親近感がいかに深かったかを物語るものと考えます。

私どもは、この国会において、各党が互いにその政策を披瀝し、国民の批判を仰ぐ覚悟でありました。君もまたその決意であったと存じます。しかるに、暴力による君が不慮の死は、この機会を永久に奪ったのであります。ひとり社会党にとどまらず、国家国民にとって最大の不幸であり、惜しみてもなお余りあるものといわなければなりません。

ここに、浅沼君の生前の功績をたたえ、その風格をしのび、かかる不祥事の再び起こることを相戒め、相誓い、もって哀悼の言葉にかえたいと存じます。

文末に「…かかる不祥事の再び起こることを相戒め、相誓い、もって哀悼の言葉にかえたいと存じます。」とありますが、これが再び起きた、偉大なる政治家の命がいとも簡単に奪われた。

深く哀悼の意を示すべきこの事実、通り一片の言葉で上辺だけの哀悼の言葉を発しながら政治的な材料にするとんでもない人たちがいることに情けなくて涙が出る。

だがここへきて、元総理大臣の野田佳彦氏が、総理大臣の孤独と重圧を経験した立場として「元総理が元総理の葬儀に出ないというのは私としては人生観から外れる」、「ご苦労さまでしたと花をたむけてお別れすることはしたい」と述べた、立憲民主党にもちゃんとした日本人がいたことに救われた。

(2022年9月記)